

# 「今こそすべて」と思い定めて

上うへ 廣ひろ 榮えい 治じ

いよいよ十二月、一年の月のめぐりが極まるといふ意味で、極月ごくげつなどとも申します。そしてこの時節、皆様はそろそろ一年の来し方を振り返り、何が足りて何が足りなかつたかを省かえりみながら、「よし来年こそは」といふ思いを紡つむいでおられることでありましょう。

アメリカの第二代大統領ジョン・アダムズも毎年の日記の終わりに、必ず「来年こそは」と書いていと申します。一年の反省の上に立つて、新たなる決意と意欲をもつて新年に臨む、これはもちろん大切なことに違いありません。しかし、極月にさしかかつたとはいへ、まだ日々は年の内に残されているのです。「来年こそは」と考える前に、今日からの残された日々をどのように生きるべきか、再確認することが先かと思うのです。

今年、一九九七年は、わが会にとって特に意義深い年でありました。会の創設から五十一年目、すなわち、百年というスパンで展望すれば、半世紀という折り返し点を過ぎ、次なる五十年に向かつて再ス

タートを切った最初の年でありました。会友諸賢一人一人が、わが会の原点に帰るべき節目の年であった、私はそう思うのです。わが会の根幹的な精神に立ち戻り、その要諦ようていを再確認し、さらなる発展に向かつて雄々おおしく不退転の歩を踏みだす、そんな節目であったと思うのです。

では、わが会の原点とは何か。「実践一筋」これに尽きるでありましょう。わが会は来世を説くことはありません。過去を顧かえりみて人間社会のあり方を学問的に探究するものでも、政治制度のあり方をまごぐるものでもありません。ただただ「今この一瞬」に、どうあれば我も人も人の幸福につながるかを、実践的に考え行動するだけなのです。

「実践一筋」というわが会の要諦からすれば、私たちにとって最も大切なのは来世でも来年でもなく、「今」現在でしかありません。「今」をよりよく生きること、「今」を倫理に則して生きること、これすなわち実践倫理そのものです。実践の積み重ねが、将来、大きな幸福を築きあげるであろうことは予測できます。しかし、私たちにとって大切なのは、未来ではなく、まさに現前し直面している「今」の実践であるのです。

いかに高邁こうまいな理想を抱き、いかに世に益する構想を構築したとしても、その人の「今」が自墮落じだらくであり、非倫理的であるとすれば、わが会はこれを受け入れることはできません。また、わが会の理念をいかに深く理解したとしても、その理念が生活に反映していなければ、その人は会友の名に値しません。なんとすれば、その人は実践者ではないからです。

「あとでなんとかすればいい」「明日やろう」「来年こそは」……そう思う人の九割方は、まず先送りしてしまったことを実現しようとはしないものです。「思う」ということにはなんの意味もありません。思ったことが行なわれる、すなわち実践がなされてはじめて、意義が生じるのです。その人がその理想

や構想に基づいて、我人ともにの幸福のために、「今」をよりよく生きようとする、「今この瞬間」を倫理的に生き切る、その瞬間にその人は実践者の仲間入りをするのであります。

このように「今」の実践にこそ価値を置くわが会の原点からすれば、年内に残された日々はまことに貴重だと言わざるを得ません。かりに三十日として七二〇時間、いったいどれほどの「今」が連続しているのか、考えてもみてください。

私たち会友の一瞬一瞬は、常に実践の連続であります。それは「行住坐臥常在実践」とでもいっていいものです。「行」——行くときにも、「住」——とどまるときも、「坐」——坐っているときも、「臥」——横になっているときも、「常在実践」、常に実践の瞬間であり続けるのです。

「臥」、つまり寝ているときまで実践ですか？　と言われそうですが、私は「ハイ」とお答えしようと思います。私は、すでに何人もの「行住坐臥常在実践」ともいっていいべき方にお目にかかる機会を得ておりますので、自信をもって申し上げることができのですが、常に実践を行じ続けてこられた方は、実践しようとか、倫理的であるうという意識からも、すっかり自由になっているものです。つまり、どうしようという意志や意識と関係なしに、その立ち居振舞いや言動のすべてが、自然に倫理的であり、一挙手一投足がいちいち実践そのものになっているのです。そうした人は、誰とも自然に愛和し、我も人もの幸福のために気づき即行し、働くを喜び、恩と感謝を一瞬たりとも忘れぬのです。こうした方になりますと、お休みになっているときも、そのまま自然の摂理に従った、まぎれもなく倫理的な形に見えるから不思議です。まさに実践の達人です。

『論語』に、孔子先生を一言で言えば、といただくことがあります。

「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし」……つまり、孔子には四つのがなかった。第

一に「意」　すなわち自分がどうしようという恣意がなかった。次に「必」　かくあらねばならないという無理押しや押しつけがなかった。第三に「固」——どうしてもでなければという固執がなかった。最後に「我」——自分へのこだわりや執着、我欲がなかった、というのです。では、そんな孔子は何に従って生きているかというのと、「天」と呼ばれる自然の摂理です。そして、私を知る実践の達人たちとは、みなこの孔子先生とそっくりでありました。

真の実践者は、常に倫理に従って日々を生きています。倫理を呼吸して生きているため、倫理的であるということにさえもこだわらず、あるがままに、我も人もが幸福であるように、実践を重ねます。こうした境地に至れば、吐く息吸う息が倫理となり、熟睡しているときにも、倫理とともにあることに変わりありません。それこそ究極の実践なのです。

さて、年の内に残された日々を、「行住坐臥常在実践」を心掛けてはいかがでしょう。自分は、どんなときに実践に悖るのか。どんな場合に愛和に欠けるに至るのか。我欲にとらわれて実践を踏み外すのはどんなときか。十日、二十日と常在実践に心掛けてみると、実にさまざまに分かってくると思います。そして、何よりも「今」が大切なのだということが、深く強く認識できるようになると思います。実践は、「今」をおいては行ない得ないのだと知るに至ると思います。

たとえ過去にどんなに立派な行ないをしていようと、「今」の実践の代わりにはなりません。未来にいかなる理想を抱いていても、「今」を実践しない言い訳にはならないのです。

「来年こそは」の心意気はよしといたしましょう。しかし、それが「今」の実践を放棄した「来年こそは」であってはならないのです。来年年なされようとする意志よりも、「今」の実践のほうが百倍も大切だということを申し上げて、今年最後の宏話とさせていただきます。